

## 1. 諸外国における幼児教育・保育の現状

諸外国でも、各国の家庭・社会の状況を踏まえた幼児教育・保育の制度・カリキュラムが実施されています。仕組みの面ではフィンランド、スウェーデン、フランスは似ていますが、教育内容においてはフランスはイングランド、アメリカと近く、就学準備が制度化されている国だと言えます。韓国・ドイツは、幼児教育と保育を施設・教育内容において共通させようと試みていることが分かります。

<p><b>フィンランド</b></p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・0～5歳:自治体・民間保育・家庭保育サービス</li> <li>・6歳:エシコウル(就学前教育)</li> <li>・7歳～:義務教育</li> </ul> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>エシコウルは保育教師と保育士の2名体制にて行われる。クラス規模は教師1名につき上限13名。ほとんどの児童がエシコウルに通う。</p> <p>エシコウルでは、子どもの主体性を尊重し、共通の活動のほか、個々人の興味・関心に沿って小グループで活動する時間がある。成長・発展および学習の前提となる能力を向上させることを重視する。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>政策分野では、0～5歳は福祉、エシコウルは教育となり、年齢で階層化されている。保育・就学前教育ともに国家カリキュラムがあるが、を生涯学習の一部としてとらえることが特徴。</p>	<p><b>スウェーデン</b></p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1～5歳:プリスクール(幼稚園)</li> <li>・6歳:プリスクール・クラス</li> <li>・7歳～:義務教育</li> </ul> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>プリスクールの主たる役割が教育か保育かで議論されており、近年改訂されたプリスクール・カリキュラムでは、言語・コミュニケーション・数的思考等の学習の側面も取り入れられている。</p> <p>一方、近年では初等教育以降に用いられた「ラーニング・スタディ」という考え方が導入され、遊びのなかで発達を促しながら、知識の獲得と向上を促す活動が行われている。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>保育園と幼稚園は1990年代後半に統合され、政策分野は教育に一元化されている。主たるサービス提供は地方自治体に委ねられている。</p>	<p><b>オランダ</b></p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>0～3歳:保育園</li> <li>2歳半～3歳:プレイグループ・早期教育(VVE)</li> <li>4歳～:基礎学校(小学校)</li> </ul> <p>義務教育は5歳以降、4～5歳が幼児クラス</p> <p>幼児クラスの教育の実態・特徴</p> <p>基礎学校では、基礎学校3年生以上の教育への準備を行うための教育(就学準備型教育)がなされている。背景には、過去に基礎学校1年生での留年が問題視されたことが挙げられる。</p> <p>「ピラミッド・メソッド」「カレイドスコープ」などの規格化された手法が採用され、就学準備を目的としているが、いずれも子どもの主体的な活動が中心となる。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>政策分野では、保育は福祉、学校は教育と二元化されている。2005年にチャイルドケア法が児童福祉法として初めて成立し、保育の充実が図られた。</p>	<p><b>ドイツ</b> 幼保一体型への志向</p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・0～2歳:保育園</li> <li>・3～5歳:幼稚園 幼保一体型施設有</li> <li>・6歳～:義務教育</li> </ul> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>PISAテストの結果が低かったことから2000年代に教育改革が行われ、就学前教育からの言語能力の獲得、保育・幼児教育と学校教育との接続について検討された。結果、各年齢において獲得すべき能力が設定された。</p> <p>一方、教育とケアに「陶治」(人格形成に向けた知識・能力の習得)が重視され、子ども中心のアプローチも根強い。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>連邦制をとっており、保育施設等の規定は法律で定めるが、保育・幼児教育の内容は州政府(国内に16有)に委ねられている。</p>
<p><b>イングランド</b> 就学準備型</p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・0～4歳:ケアサービス</li> <li>・3～4歳:親の希望に応じて幼児教育</li> <li>・5歳～:義務教育</li> </ul> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>すべての施設で、「ナショナル・カリキュラム」の一環として0～5歳児の「学びと発達」「ケア」の指針を定める「乳幼児基礎段階」(EYFS)に沿った活動が行われる。EYFSには、コミュニケーション、運動、社会性、読み書き、数的思考、表現、環境への関心という各領域において、5歳までに獲得すべき目標が示され、それに沿った教育活動が行われる。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>政策分野は教育だが、子ども・家族サービスに関して横断的な事業推進を担う独自の組織(シュアスタート局)がある。一方、評価は別組織(教育水準局)が行う。</p>	<p><b>アメリカ</b> 就学準備型</p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>0～4歳:低所得者向け早期教育(ヘッドスタート)</li> <li>0～4歳:民間保育サービス</li> <li>4～5歳:(プレ)キンダーガーデン(就学前教育)</li> <li>6歳～:義務教育(州によって異なる場合有)</li> </ul> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>階層間格差・貧困対策として、1960年代から貧困層の児童および保護者に対する教育・支援プログラムとしてヘッドスタート事業を行い、低所得層の社会的統合を目指す。一方、広く一般にも「落ちこぼれゼロ」(NCBL)政策の一環として「よいスタート、賢い育ち」(GSGS)プロジェクトがあり、キンダーガーデン入学時で必要とされる能力を想定し、3～5歳児の言語、認知、読みを教育し、週単位で達成度合いを把握することが始められた。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>主として社会保障政策にあたる。保育は民間。</p>	<p><b>フランス</b> 就学準備型</p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・0～2歳:保育所</li> <li>・3～5歳:エコール・マテルネル</li> <li>・6歳～:義務教育</li> </ul> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>ほぼすべての子どもがエコール・マテルネルに通う。この時点でユニバーサルな保育サービスとも言えるが、活動内容は就学準備のための教育機関の性格が強い。教育課程においてはエコール・マテルネルと小学校(6～10歳)が一体的に捉えられ、学習指導要領では、言語、読み書き、運動、環境への関心、創造性のほか、「生徒になる」という項目において学校での規範を学ぶことが明記された。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>0～2歳は福祉、3歳以上は教育と年齢で階層化されている。エコール・マテリアルのカリキュラムや評価は教育省に委ねられている。</p>	<p><b>韓国</b> 幼保一体型への志向</p> <p>保育・幼児教育の仕組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・0～5歳:オリニジップ(保育園)</li> <li>・3～5歳:幼稚園</li> <li>・6歳～:義務教育</li> </ul> <p>3～12歳に民間の教育機関ハゴン(学院)がある</p> <p>就学前教育の実態・特徴</p> <p>経済的に豊かな家庭が早期教育になり、幼稚園の競争も激しくなるなか、低所得層の子どもへの教育機会が問題視されるようになる。それに対して、ヘッドスタート(アメリカ)に近い「希望スタートプログラム」の開始された他、近年では幼保共通のカリキュラム「ヌリ課程」(3～5歳児対象)が導入され、園ごとの質をそろえる努力がなされている。</p> <p>制度・カリキュラム</p> <p>幼稚園は教育、オリニジップは福祉と二元化されている。統一カリキュラムとなるヌリ課程は教育管轄となっている。</p>

## 2. 諸外国における特徴的な幼児教育・保育の実践・制度

諸外国の実践・制度は、レッジョ・エミリアに代表される「ホリスティック・アプローチ」とエコール・マテルネルに代表される「就学準備アプローチ」を両端に置くと、前者をカリキュラム化したものが「ピラミッド・メソッド」、就学後者については「ナショナルカリキュラム」が例に挙げられます。その間に幼保をつなげる活動・カリキュラムであるテ・ファリキ、ヌリ課程、KITAなどを位置づけ、日本の幼児教育・保育を検討する見取り図として整理しました。

### ホリスティック・アプローチ

生涯学習の基盤として幼児期を位置づけ、ケア・養育・教育に対して包括的なアプローチをとる幼児教育

#### レッジョ・エミリア(イタリア)

##### 概要

イタリア・レッジョ・エミリア市において独自に発展した幼児教育手法。0～2歳が通う乳児保育所と3～6歳が通う幼児学校にて実践される。

##### 活動における特徴

子どもたちは小グループに分かれ、中長期的な期間をかけてグループで創造的な活動(プロジェクトツォーネ)を行う。活動は子どもたちが話し合って選択する。それらグループは、教育の専門家(ペタゴニスタ)と美術の専門家(アトリエリスタ)が保育者としてチームを組んで進行される。子どもたちの活動の様子は保育者によって記録され、保護者や市民に公開・議論され、その内容が教育・活動へのフィードバックされる。

#### ピラミッド・メソッド(オランダ)

##### 概要

1994年に開発され、オランダの幼児教育が共通して採用する教育手法。自分で選択して決断できる力を養うことを重視する。

##### 活動における特徴

活動は、子どもの自主性(やる気)に基づき、保育者の積極的なサポートが行われる。この関係を築くため、子どもと保育者のあいだに心理的な愛着を育むこと(養護の基礎)、子どもの発達にあわせて学ぶ対象との距離を広げること(教育的な基礎)を活動原理としている。レッジョ・エミリアと同じく「プロジェクト」という活動単位を持ち、個性・情緒・知覚・言葉・思考・空間と時間の理解・運動・芸術という8つの発達領域にまたがる教育を行う。

活動内容はホリスティック・アプローチだが、目標設定は学習達成度に基づく就学準備型に近い

### 幼保一元化の動き

年齢別ないしは制度別に二元化された仕組みを解消することを目的とした幼保一元の動き

#### 幼稚園・保育園一体型KITA(ドイツ)

##### 概要

幼稚園と保育園(さらに学童保育)を一体化した、0～5歳までの子どもが通う複合型幼児教育施設。都市部にみられ、特にベルリンではKITAへと統合されている。

##### 活動における特徴

活動は施設ごとに違いがあるが、共通して「教育施設」と位置づけ、言語支援や学校との連携が目指されている。異年齢の子どもが同居しながら学ぶことができることが長所だと捉えられている。

#### テ・ファリキ(ニュージーランド)

##### 概要

1996年に制定された、0歳から就学までの全乳幼児施設に共通するナショナル・カリキュラム。

##### カリキュラムの特徴

知識・能力に基づく発達段階をカリキュラム化するのではなく、育ちや学びにおける文化・社会的文脈が重視される(4原則:エンパワメント・全体的発達・家族とコミュニティ・関係性)。理念的な内容であることから、各保育施設の地域特性や子ども一人ひとりの個性を反映しやすいと言われる。同時に、心身の健康・所属感・貢献・コミュニケーション・探究というテ・ファリキの5つの要素を視点として子どもの経験を評価する手法「ラーニング・ストーリー」も開発・運用されている。

#### ヌリ課程(韓国)

##### 概要

2012年に5歳児を対象に始められた、全人教育と創造性育成を二本柱にした幼保一元型カリキュラム。2013年には3歳児にまで拡張。

##### カリキュラムの特徴

幼稚園とオリニジップ(保育園)がともに依拠するカリキュラムとして、特性の育成、自国文化の理解、創造性の育成、小学校との連携、主体的経験と遊び中心の統合教育を基本的な方向とする。

韓国では、カリキュラムのほか、教師養成の一元化、財政支援システムの統合についても検討されており、カリキュラムが万全に運用できるような政策が進められている。

#### 乳幼児基礎段階 EYFS(イングランド)

##### 概要

義務教育段階(5歳以降)の各年齢段階におけるナショナル・カリキュラムを見据え、未就学児を義務教育へと円滑に接続することを目的としたカリキュラム。3～4歳を対象としている。

##### カリキュラムの特徴

2002年の策定後、2012年に改訂されている。改訂では、学習目標が絞り込まれ、コミュニケーションと言語、身体的発達、自己認識、感情、社会性の発達という3点が特に重視された。特に、5～6歳の年齢段階が意識され、英語の読み書き、数的思考、環境の理解、表現芸術とデザインの4つの特定領域に重点が置かれた。重視される3点と4つの特定領域については学習目標(ELG)が設定され、それに即して子どもの活動をプロファイリングすることで評価が行われるようになっている。

### 就学準備アプローチ

就学準備や「学校へのレディネス(readiness for school)」を重視するタイプの幼児教育

#### ヘッド・スタート(アメリカ)

##### 概要

貧困の連鎖を解消するため、低所得層の幼児に対する補償教育プログラムと保護者に対するエンパワメントを行う二重の構造をもったプログラム。1965年当初は3～4歳だった対象が、0～2歳児へと展開している。

##### 活動における特徴

子どもの認知・情緒・身体的な総合的な発達を支援するほか、読み書き、数的思考、言語能力を向上させることを目的としている。そのほか、保護者の育児スキルや医療・健康サービスへのアクセスなどの子育ての健全化を図るプログラムでもある。就学のための学力よりも、就学に向けて家庭全体を厚生しようとするプログラムと言える。

効果に関する調査は行われているが、効果(IQの向上)が徐々に失われる等、効果への疑義が示されている

#### エコール・マテルネル(フランス)

##### 概要

19世紀末に制度が創設され、現在は小学校への接続を強く意識したものとなっている。義務教育課程ではないが、無償であるため3歳になるとほぼ全員が就学する。

##### 活動における特徴

国が定める学習指導要領では、言語力を身につける、文字表現を発見する、生徒になる、身体を用いて動き、表現する、世界を発見する、知覚する、感じる、想像する、つくるの6つの領域が設定され、各領域で、保育学校終了時に習得すべき能力が明示されている。

上記要領は2008年に改訂されたものだが、改訂前よりも小学校との接続が意識されている。